

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第2部 解釈

第八章 宗教思想史の文脈で②

「アメリカ宗教思想の二つの流れ」

Presented by

GAコーナーストーン

1

はじめに

Not-God 258

第二部の全体像

- 第七章 米国史のより広い文脈で
- 第八章 宗教思想史の文脈で
- 第九章 AAの意味と意義
- 補遺A AAと「絶対的存在」
成長あるいは完成としての「霊的なもの」

2

第八章 宗教思想史の文脈で

アウトライン

1. 「宗教的というより霊的」 - AAの宗教的本質
2. アメリカ宗教思想の二つの流れ
3. 降伏・回心・救済 - プログラムの宗教的構造
4. 言葉と証し、反専門主義、反知性主義
5. アノニミティの意味と現代的意義

3

第八章 宗教思想史の文脈で

Not-God 313

前回の復習

- 「^{スピリチュアル}宗教的というより霊的」
 - AAやGAは表面的には宗教を避けているが、本質的に宗教的
 - 「^{スピリチュアル}霊的」という言葉が選ばれた背景には、近代との緊張関係や、実践上のリアリティがある
- ⇒ 今回は「^{スピリチュアル}霊的」プログラムの思想的基盤を探る

4

第八章 宗教思想史の文脈で

今回のテーマ

- アメリカ宗教思想の二つの流れ

これらがお互いに矛盾している必要はないし、実際に矛盾してはいない

Not- God p.287

キーワード

- ・ 福音主義・敬虔主義
- ・ 人間中心主義・リベラル

5

第八章 宗教思想史の文脈で

今回の問い

1. なぜ正反対の二つの宗教思想を統合できたのか
2. 「神への降伏」と「人間の努力」は矛盾しないのか
3. 二つの思想はどちらも必要なのか

6

根本的な宗教的洞察

スピリチュアル
宗教的あるいは霊的な根本に関わる思想は、「神」がいるということ、つまり、人間は神ではない、ということだ

- 人間の境遇は不完全
 - しかし、完全性への促しがある
- ⇒ この緊張が宗教を生む

7

罪と救済の構造

宗教言語の古典的な表現で、人類は罪（sin）の境遇にあって、〔キリスト教的〕救済（salvation）が必要だと語っている。古代からのこの認識と感じは、アウグスティヌスの「私たちの魂は、あなたさまのもとで休むまで安らげない」と述べているのはよく知られている

罪：人間の限界、不完全性

救済：限界からの解放

あなたさま：自分の外側において欠かせないもの、
（Thee） 自分よりも大きい力

8

人間の悲劇的境遇

限界をはらんでいるので、人間の境遇は古典的な意味からも悲劇的といえる。手にすることができる、あるいは与えられる以上に欲し求めるところに、あらゆる悲劇的人物が避けがたい「悲劇的な欠点」がある

この欠如が生むもの

- 他者を求める境遇
- 宗教的靈感、愛、芸術の源

⇒ 充足への希求

9

人間の限界性への二つの応答

人間の協働による充足

大いなる他者による充足

人間の限界性

10

① 大いなる他者による充足

完全なるものは人間を超えたところ（少なくともひとりひとりの自己を超えたところ）にしかない

- ・ 人間と大いなる他者の分離
 - ・ 「自己の外部」からの「救済」
 - ・ 畏敬の念と謙遜
- ⇒ 敬虔主義(pietist)・福音主義(evangelical)

11

② 人間の協働による充足

人間であることの本質は、自己と他者がともに充実するために、自己が充足に協力し、充足を探し求め、あるいは少なくとも充足に向けて開いていこうと気づくように語られる

- ・ 人間自身の救済への参与
 - ・ 人間は限界を超える力を持つ
 - ・ 希望と責任ある行動
- ⇒ 人間中心主義(humanist)・リベラル(liberal)

12

第八章 宗教思想史の文脈で

二つの思想の対比

人間中心主義・リベラル	福音主義・敬虔主義
人間の参与による救済	大きな力による救済
希望・責任	謙遜・畏敬
人間の意志	神の意志
努力 (effort)	降伏 (surrender)
「自己の内部」から	「自己の外部」から

13

第八章 宗教思想史の文脈で

Not-God 287

二つの思想の関係

これらがお互いに矛盾している必要はないし、実際に矛盾してはいない。宗教思想の歴史は、何と云っても、二つのあいだの創造的なバランスの大切さを確かめる努力と理解しうるのではないか

- 両者をどう統合するか
- バランスをどう保つか
- 実践にどう活かすか

14

米国の宗教思想における二つの思想の統合

この二つのいずれもが米国の宗教思想をかたちづかってきて、両者ともにAAのフェロウシップのプログラムのなかに表現されている

- ピューリタンの遺産（敬虔主義・福音主義）
 - 啓蒙主義の影響（人間中心主義・リベラル）
- ⇒ プラグマティズムによる統合

15

AAにおける福音主義・敬虔主義

AAにおいては、第一の福音主義的で敬虔主義的な価値観が支配的に広がっていた

- オックスフォード・グループの影響
- 新正統主義の影響

16

オックスフォード・グループの影響

AAを生み出したOGが、福音主義的で敬虔主義的な思想を深く広めたのだ。ところが、このグループは同時に、そしてまさしく米国的に、表面上の敬虔主義的な価値観を圧倒するような、人間の可能性についてのリベラルな楽観主義も備えていた

- 敬虔主義・福音主義的な要素
 - フランク・ブックマン、教義など
- 人間中心主義・リベラルな要素
 - 米国的なもの、伝道など

17

新正統主義の影響

1934年は米国宗教史において「奇跡の年（annus mirabilis）」と呼ばれた。合衆国で新正統派（neo-orthodoxy）神学が活躍した開花の時代といえる

人間を超え、人間より深く、あらゆる人間の能力にまさる神への信仰において希望がもたらされる

- 全能で、人間からかけ離れた神の必要性
 - 人間の強さへの懷疑
- ⇒ まさにこの年、ビル・Wは霊的体験をした

18

初期メンバーの体験

「人間」であることの意味をめぐるAAの考え方の核心は、（中略）初期のメンバーが自身のアルコール依存症について体験したことにあった。

- 自分の存在に対しての深い謙遜が**敬虔主義**の中核
- **合理化**と**コントロール**という**近代**の前提
- 強迫的ギャンブラーになったこと以上に、へりくだるよう導かれる理由はない

19

他のアプローチの失敗

20世紀半ばの米国で、啓示による宗教から道徳を説く心理学へと社会的権威が移行したことで、酒をやめていないアルコール依存症者はさらに悲惨な自己憐憫の苦しみに追い込まれることとなった

- 教会：「罪」を厳しくとがめ、道徳的に生まれ変われば救済が約束されると説く
- 科学：「未成熟」を理解し、成熟した大人になると説く

⇒ どちらも多くの依存症者を癒すことはできなかった

20

人間中心主義の必要性

AAの人間中心的でリベラルな側面にもまた納得がいく。まず、AAは米国的でもあり、啓蒙主義国家である合衆国の歴史をとおしてあらゆる思想にもっとも深く溶け込んでいたのが、人間中心的でリベラルな思想だった

- AA=米国的
- 啓蒙主義＝米国的＝発展＝近代的
- 人間中心的でリベラルな思想が米国のメンタリティ

21

ウィリアム・ジェームズの役割①

自分たちの「靈的体験」が重要であることを理解し教えるための受け皿にとどまらず、根本においては福音主義的で敬虔主義的な洞察を人間中心主義的でリベラルにとらえる道筋も、その洞察が正しいことを示す論点も、ジェームズの思想に見出していた

『宗教的経験の諸相』

- 靈的体験の価値を認め、理解する枠組み
- プラグマティズムによって、靈的体験が近代に受け入れられた

22

ウィリアム・ジェイムスの役割②

フェローシップ

仲間との交流を発展させることにも欠かせず、また、彼らのプログラムの中核にあるものでもある、開かれた心を培うのに、ジェイムズの多元主義的な考えに初期のAAメンバーたちが従ったことは助けになった

多元主義

- スタイル、思想の違いを歓迎
- 「寛容であること」の積極的価値
- 絶対主義への警戒
- フェローシップを育てていくための導き

23

二つの思想の統合

アルコールリクス・アノニマスにおいて、福音主義的経験主義の宗教思想と人間中心主義的なリベラルの宗教思想とが統合されているということである

- 二つの思想のどちらか一方を選ばなかった
- 「人間による充足」と「大いなる他者による充足」
どちらも必要
- 実践において統合

24

第八章 宗教思想史の文脈で

まとめ

1. なぜ二つの思想を統合できたか
 - ・ 実践的な必要性和アメリカ的文脈
2. 降伏と努力は矛盾しないか
 - ・ 対立ではなく、相補的關係
3. 二つの思想はどちらも必要なのか
 - ・ どちらか一方では不完全

25

次回予告

テーマ

「降伏・回心・救済－AAプログラムの宗教的構造」

1. 降伏 (Surrender)
2. 回心 (Conversion)
3. 救済 (Salvation)
4. 12ステップの宗教的構造分析

26

ご静聴、ありがとうございました。



Ernie and Bill (2008)